

(注二) 「大塔建立と頼豪」(『長崎大学教育学部人文科学研究報告』平成二年三月)

(注三) 早川厚一、佐伯真一、生形貴重三氏による(平成三年九月)。

(平成七年五月八日受理)

門本の編著者は、清盛の外祖父母への願いを大反れたこととして批判するのであるが、その間に、安徳天皇の将来をも暗示させたりして、混線を来してしまったのではあるまいか。

この安徳天皇については、延慶本が「御在位三ヶ年之間天変地竝打連テ諸社諸寺ヨリ怪ヲ奏ル事頻也」と述べる。そして、「吾朝ニハ人臣ノ子トシテ位ニ踐末タ無トソ承ル 此ハ正キ御裳濯川ノ御流カ、ルヘシヤ」という「或人」の批評を付け加えている。この批評は安徳天皇を「人臣ノ子」の帝ではなかったかと批判する色合いが強そうである。この批判は「皇子親王ノ宣旨蒙給事」の清盛の月詣でに影響して行くのであるが、その時、その批判は『愚管抄』の「イツクシマノ明神ノ利生」ということを突き抜けて、直接平家を対象とすることになっている。

一方、延慶本、長門本と当道系諸本のうち覚一本は「昔出雲国ニシテ素盞烏尊ニ被切奉タリシ大蛇靈劔ヲ惜ム執心深シテ八ノ頭八ノ尾ヲ標示トシテ人王八十代ノ後八歳ノ帝ト成」たという説を載せている（源平盛衰記は「老松」の報告となつてい、詳しく竜宮城の有様を記すが、趣旨は変わらない）。この記事は、『愚管抄』の「龍王」に神話の「大蛇」を習合させたものと見られる。

また、諸本「靈劔」が「龍神ノ寶」となつてしまつたと記している（屋代本が「龍神取之ヲ竜宮ニ納メテケル」とする等、表現には異同がある）が、この「龍神」は「平家物語」における位置からすると、「大蛇」の変身かと思われる。一方、『愚管抄』によれば、この「龍神」は安徳天皇——「龍

王ノムスメ」——厳島大明神ということになる。しかし、「平家物語」では、この「龍神」が厳島大明神でもあるということは、それ程明確ではない（特に、延慶本では厳島神主景弘が宝剣の探索を命じられたことを記しているの、厳島大明神とは考えにくい）。

四部合戦状本では、以上の外に、源中納言雅頼の許なる者の見た夢が問題になった後、清盛が厳島社に参詣したと記されている。その時、大明神の御前で神楽を演じていたら、十余歳の「小女」に神がついて「東国興^{マシ} 兵革天下不安穩^ル」と告げたという。この文脈については、「神々の議定で清盛をかばいきれなかつた厳島神が、伊豆の頼朝に節刀を渡すべく使いが向かつた（省略——筆者注）ことを清盛に急報した——というような神々の世界と人間界とを具体的に連接させた展開と読むこともできる」という『四部合戦状本平家物語評釈（八）』^{（注三）}の「語釈」に同じたい。

最後に、清盛が厳島の内侍との間に儲けた娘が御白河法皇の後宮にすめられて、女御の様に振る舞っていたことが諸本に記されている。この内侍の娘については、延慶本、長門本が最も注目し、清盛が「内侍トテ有ケル巫女マテモモテナシ愛」したと、高倉上皇が崩御されて十四日にこの内侍の娘が「女院参リノヤウニ」して進められたことが記されている。特に最後の後宮入りの一段は、清盛の常軌を逸した政略として批判的に描かれているようだ（木曾義仲が平宗盛に掣になることを申し込んだ一条に類する面をもつ）。

（注一）市古貞次編。昭和五三年三月。

（未完）

暗示を与えられることこそあれ、「宰相入道」の疑問で「青侍」の夢が全く意味を失うということはないと考える。

さて、いずれにしても一度清盛に与えられた「節度ト云劔」は右のように召し返されてしまうのであるが、その理由は「勅定ヲ背ニ依テ」（延慶本と中院本・両足院本・八坂本を除く当道系諸本）、「朝政を忽緒し天下の命を悩亂す」（源平盛衰記）、「朝位をいるかせにし佛法王法のかたきなり」（長門本）、「はういちじやけんにおはせしかば」（中院本・八坂本）といった表現になっている（四部合戦状本、両足院本は特にその理由に触れない）。これは、当道系諸本の「節度ト云劔」が与えられた場面とは対応しているが、先述のように延慶本、長門本ではもともと「ソモ一期ソヨ」と限定されていたし、源平盛衰記では「子孫迄も可守」となっていた。延慶本、長門本、源平盛衰記は場面間の対応、釣り合いが甘く保たれているとは評し難い。

清盛と厳島との関わりで注目されることのもう一つは安徳天皇の誕生である。この「平家物語」の一連の記事は『愚管抄』との深い関わりが考えられているので、次にその『愚管抄』の記事を引いて、始めることにする。

皇子ヲ生セマイラセテイヨ／＼帝ノ外祖ニテ世ヲ皆思フサマニトリテ
ント思ヒケルニヤ様々ノ祈ドモシテアリケルニ先ハ母ノ二位日吉ニ百
日祈ケレドモシルシナカリケレバ入道云ヤウ　ワレガ祈ルシルシナシ
今見給ヘ　祈出デン　ト云テ安藝國嚴島ヲコトニ信仰シタリケルヘハ
ヤ船ツクリテ月マウデヲ福原ヨリハジメテ祈リケル　六十日バカリノ
後御懷妊トキコエテ治承二年十一月十一日六波羅ニテ皇子誕生思ヒノ

如クアリテ思サマニ入道帝ノ外祖ニナリニケリ

海ニシツマセ給ヒヌルコトハコノ王ヲ平相國イノリ出シマイラスル事
ハ安藝ノイツクシマノ明神ノ利生ナリ　コノイツクシマト云フハ龍王
ノムスメナリト申ツタヘタリ　コノ御神ノ心ザシフカキニコタヘテ我
身ノコノ王ト成テムマレタリケルナリ　サテハテニハ海ヘカヘリヌル
也　トゾコノ子細シリタル人ハ申ケル

『愚管抄』は「母ノ二位」は日吉社へ、清盛は厳島社へと対照して描くが、延慶本、長門本は夫婦で祈願を始めたとし、当道系諸本のうち屋代本・小城本・中院本では清盛一人で両社に行ったようになって（覚一本を始めとする当道系の残りの諸本には日吉社詣でがない）。又、月詣でを始めてから懷妊までの期間も、延慶本は三箇月、当道系諸本のうち中院本・八坂本は三箇年とする（長門本や中院本・八坂本以外の当道系諸本は期間を記さない）。

長門本はこの月詣での折に清盛が、「光くまなきつるき」を徳子が懷に抱き、その後、時子がそれを貰い受けるという夢を見たとし、この靈夢譚に対して京童が「ひんしやのためにはいしる大事かな」と批評した旨が付け加えられている。長門本は、清盛の月詣でについて、清盛の欲深さを指弾する動きがあったことを記すが、これもその一つということだろうか。しかし、天皇の外祖父母になろうという野望の問題はそれとして、この靈夢は、筆者には安徳天皇の入水等を暗示しているように見える。長

おうとする場面が描かれていることになる。

猶、源平盛衰記では、陰謀が洩れてしまう場面「行綱中言」でも、行綱の話の聞きに出る清盛が「銀にてひるまきしたる小長刀」を主馬判官盛国に持たせている。「手鉾」について先の箇所「常の枕をはなたす立られたる」という説明があつたが、この「小長刀」もそのようなものらしく描かれている。猶、盛国に持たせている情景と「鞘はつし左の脇に夾」んでいる情景では切迫度が全然違う。源平盛衰記は、行綱の話を聞く場面と法皇の幽閉を思い立った場面とを対照して描きながら、清盛の情緒の異なり具合を具象化する小道具として甘くこの剣を使っているのである。

さて、「節度ト云劔」はもう一箇所、有名な「雅頼卿ノ侍夢見ル事」の章段で出て来る。そこでは、清盛に預けていた「節度ト云劔」を召し返して、頼朝に渡すということが夢の中で行われる。この逸話については、その夢を聞いた宰相入道成頼が「厳島ノ明神ハ女躰トコソ聞ケ 僻事ニヤ」と評したことが問題となっている。ここは、研究者が様々の視点から解釈を試みているところであるが、「平家物語」編著者も様々に合理化を企てた箇所と見える。

問題の神々の議定の場合は神祇官かと思われる「衣冠正クシタル人々並居給タ」る所である。源平盛衰記はこの席に「紅のはかまきたる女房の世にも厳くおはしける」を同座させているが、この席は、源平盛衰記以外の諸本がそうであるように、女性が同座しているとは考えにくい（源平盛衰記以外の諸本では「衣冠正クシタル」貴族男性の会合ということだろう）。さ

て、当道系諸本の屋代本・中院本・八坂本以外では夢の中で明白に厳島大明神である旨が語られている。そこで、成頼の疑問は当然ということになるが、或る僧が、厳島大明神は「三明六通の靈神にて在まさは俗体に現じ給はんもかたかるべきにあらず」（覚一本）などと、成頼の不審に答えて、解説することになっている。又、長門本と当道系諸本のうち八坂本とは、正頼（成頼）自身が夢の「ふしきさ」を最後に会得することになっている。但し、八坂本の理解の仕方は前記の或る僧のそれと変わらないが、長門本の場合は厳島にも客人宮として氣比大明神が控えている（胎金両部のすいしやくあらはれてまします）からと、独自の理解の仕方となっている。以上の諸本に対して、延慶本、四部合戦状本と当道系諸本のうち屋代本・中院本では疑問に答えるところが出て来ない。この四本のうち延慶本、四部合戦状本では、全ての文に「ヤ」「不心得」「歎」「不思議」といった成頼（俊憲）の疑問を示す言葉が付いている。結局、成頼（俊憲）はいぶかりながら、一つの予想を得ることになっているのだが、厳島大明神のことも信じ難さを強調する事柄の一つということなのだろう。成頼（俊憲）の予言の中心は藤原氏將軍の出現ということにあり、物語の現時点では絵空事しか思えないことなので、このような不可解な夢という風にしたのであるまいか。当道系諸本の屋代本・中院本では藤氏將軍に及ぶところはない。又、「青侍」の見た夢の中で神の名が示されている訳でもない。従つて、「平家ノ方人スルカト覚キ」を厳島大明神かと考え、それも「俗躰」というのは変だというのは「宰相入道」の解釈の域内のことで、聴衆はその解釈で

この最後の言葉について「ソモ一期ソヨ」と付け加えると、姿を消した(四部合戦状本では盛国に「不叶孫世」と告げて退出することになっている。しかし、当道系諸本では「ソモ一期ソヨ」と限定することはない。又、屋代本・小城本では清盛が「大師ニテ坐々ケルカ」と怪しんで人を蹤けさせるが、覚一本を始めとする他本では姿が見えなくなったので「大師にてましくけり」と思うと小異がある。源平盛衰記も当道系諸本と同様に限定は付かないが、貞能の報告を聞くまでが夢の中のこととされている。一方、『古事談』では清盛の問いに答え、自ら大師と名乗る。『古事談』は記事が簡略で、以下、託宣までの記事を欠く。報告を受けた清盛は、後生菩提の為(長門本では子孫繁昌の為。四部合戦状本と限定のない源平盛衰記や当道系諸本では「娑婆世界思出」にする)東曼陀羅を静妙に書かせ、西曼陀羅を自筆で書いて(延慶本と当道系の中院本以外は、東西を逆にする。又、屋代本と小城本は絵師の名を浄教とし、四部合戦状本は名前を記さない)、奉納した。その後、清盛は、上京して次第を奏聞し、厳島社の造進を許された。やがて、清盛は厳島社の造営を完了し、遷宮を遂げた。その遷宮の時、大明神が内侍に付いて(当道系諸本で、両足院本・八坂本以外は内侍の名を出さない。『古事談』では「神拝之比」とし、「巫女」とする)託宣した。

この託宣の内容についても以下のような異同がある。その託宣の一つは、「大師」の言葉と重複するが、「官位一門ノ繁昌」を告げ、「ソモ一期ソヨ」と限定するものである(当道系諸本では「悪行アラハ子孫マテハ叶マシキ

ソヨ」といった表現である。一方、源平盛衰記はこども「子孫迄も可守」となっている。『古事談』は「君ハ可至従一位太政大臣」ということだけである。従って、以下の「劔」に関する一条は『古事談』にはない。もう一つは、造進の賞として「朝ノ御守リト成者」に与えられる「節度ト云劔」を与えるということである(長門本では、託宣は「今夜夢に財をさつけんするぞ」とあるだけで、その夜の通夜の夢で「しろかねのひる巻したる小長刀」を授けられることになっている。当道系諸本のうち、覚一本・百二十句本・両足院本・八坂本も託宣での言及はなく、夢で「鬘ゆふたる天童」から授けられることになっている。猶、源平盛衰記や当道系諸本のうち屋代本・平松家本・竹柏園本・小城本・(中院本)は「入道院参企」(源平盛衰記)の条で「そのかみ安藝守と申し時厳島社の神拝の次に霊夢をかうふり賜る」「銀のひるまきしたる手鋒」(同前)と記している。一方、四部合戦状本は「雅頼青侍夢」に「日来預置太政入道之劔」とあるだけで、預けた経緯にふれない。

厳島大明神から清盛に授けられた「節度ト云劔」は、「重盛父教訓之事」の章段で、清盛が御白河法皇の幽閉を命じようとする時に、携えられていた。そして、そこでは「小長刀」は「秘蔵ノ手鋒」と表現されていた(但し、当道系諸本のうち覚一本・鎌倉本・(百二十句本)・中院本・両足院本・(八坂本)は「小長刀」で統一している)。今井正之助は「手鋒」と「小長刀」を同一のものと考証されているが、そうすると、全「平家物語」で清盛が厳島大明神から授けられた「節度」を腋挟んで御白河法皇に立ち向か

やますへからす これをまつ代におよひみやしろはいせんとうのときはとうこの國にくわんそうをへて國ちうさいはたをかさねてみやこ

ゑほんそうすへからす

の部分は、源平盛衰記に記されている十二月二十八日に重て宣下された文と深い関係がありそうに見える。

長門本は右に記して来た一連の記事の後に、弘法大師との深い関係を物語る文を付け加えている。

弘法大師は密宗を伝えるために入唐する時、厳島に参籠して、大明神に対面し、助力を乞うた。唐に渡った大師は、恵果大師について真言宗を学んだ。帰朝する前、大師は天台山に登つて、關伽水を天に投げ上げた。すると、黒雲が来て、それを高野山の奥の院に運んだ。この黒雲は「淀姫」であった。大明神は、次いで、「淀姫」を「娑竭羅龍王」の許に遣して、大師の三鉢が高野山の「金松」に懸かるように計った。大師は、こうしてこの「金松」の植えられた地に住まれることになった。帰朝した大師は先ず厳島に参詣し、金泥法華経等を奉納した。その時、「たらえう」に「本地の文」(前記、源平盛衰記の「御託宣の文」に相当)を書いて、ある岩の下に埋めたと伝えられている。

右の記事は、厳島大明神が「弘法興行のあるし」であることを語ると共に、次節で記することになる高野山との関係を強調するものとなっている。又、それ程表面に出ていないが、弘法大師は渡海して入唐したのだから、「旅の神」であったことをも語ることになっていよう。このように見れば、

長門本の厳島大明神の縁起は首尾のよく整ったものと評することが出来る。

三

厳島神社というと平清盛が先ず浮かんで来る程に、厳島と清盛との関係は深い。その清盛の厳島との関わりを「平家物語」はどう描いているか、次に見てみよう。

清盛と厳島との関係は、厳島神社の復興に始まる(ここは『古事談』にも関係する説話がある)。

高野山の大塔の供養が行われた時、八十余(四部合戦状本や当道系諸本は年齢に触れない。一方、源平盛衰記は七十余とする)の老僧(『古事談』では、清盛自ら修造作業に当たっていた時とし、僧については「著香染之僧」とだけ記している)が家貞(長門本は貞能、四部合戦状本は盛国とする)を呼んで、清盛への取り次ぎを乞うた。清盛が威儀を正して見参すると(当道系諸本では供養の後奥院へ参籠した時にどこからともなく出て来たとして、取り次ぎのことがない。源平盛衰記も取り次ぎがないが、こちらは老僧の話全体が夢の中の出来事となっている。『古事談』も先記のように出所に言及せず、取り次ぎもない)、老僧は、氣比と厳島は金胎両界の神だが、今厳島社が壊れているので、任期を延ばして造進するように勧めた。そして、再建がかなえば「官位一門ノ繁昌肩ヲ並ル人有マシキソ」と告げた(『古事談』は前記の如し。猶、僧は再建を勧めるだけで、賞に言及しない)。老僧は、清盛と別れた後、彼の正体を窺ってつけていた家貞に、

見えた。近付いてみると、幣を付けた「るりのつほ」であつた。壺の中には「目出貴女」がいた。「貴女」は「西の國」の者だが、「おもふ心ある故」に遠い旅に出て来たと云つて、食を求めた。藏本は「貴女」の言う通りに白米「本器五升」を洗つて器に盛り、塩も茅の葉に乗せて供えた。食事が済むと、「貴女」は藏本を案内人として、島内を巡つて、住む所を探した。そして、「こもりの浦みかさのはま」に来た時、「貴女」は「あらいつくし」と感嘆の声を上げた。そこで、御賀島を蔽島と呼ぶようになったというのである。

ここは源平盛衰記にもある。源平盛衰記の縁起は、ここから始まるので、鞍職は單なる漁師のように見える。長門本と源平盛衰記の違いには次のようなことがある。長門本は壺とするが、源平盛衰記は船に壺が乗っていたとする。又、「貴女」も三人となっている。「貴女」の言葉も「為百王守護の離本所近王城」と、神らしいものにされている。源平盛衰記のこのところはそこまででそこから以下の、長門本にある供御や地名に関する記事はない。『(蔽島の本地)』は、源平盛衰記より長門本に近く、この前のところと同じように筋が殆ど一致している。長門本との違いの主なもの、壺が全く出ない(船の「やかた」となっている)こと、「貴女」は「なんてんちく西正國の天一王のひめみや」で、「しゆしやうさいと」の為に来日したこと、「くろますのしま」が「天ちくの岡のしま」に似ているので、ここに鎮座することになったということ等である。猶、国会図書館蔵明暦一年刊『いつくしまの御本地』にもこの部分はある。

大明神は、藏本の造進した仮殿に三十三所で入った。その後、藏本に、上京して朝廷に申し入れるように命じ、自分は靈鳥となつて紫宸殿の上に櫛を集め、三つの大きな星となつて三つの光で皇居を照らそうと、告げた。藏本は上洛して、恐るおそるこの旨を申し上げた。天皇が怪しんでいると、藏本の言葉の通り三つの光が御座に射して来た。天皇は驚いて、神領を寄進した。藏本は下向して、その神主になった。蔽島大明神の誓願は、衆生を救い、仏法を興行するということであつた。

源平盛衰記のこのところは、大明神が朝廷に神として認められる経緯、天皇の大明神への寄進と国司達へ指示した内容、大明神の垂跡、託宣の文という内容、順になっている。長門本との主な違いとしては、源平盛衰記では仮殿のことがなく、直ぐ神殿造営の話になっていること、長門本の場合配流の身の上であることを心配する藏本を大明神が主導して朝廷の認知を得たという風であるが、源平盛衰記では鞍職が大明神の希望を叶える為に甘く助力しているように見えること、長門本は三つの星が出現するという靈驗を中心にして描くが、源平盛衰記では「客星」出現の予言はあるものの、靈驗譚としては靈鳥の行動が中心になっていること、国司達に蔽島社後援の命が下つたことを記すこと、託宣の文などにも異同があること等が挙げられる。一方、『(蔽島の本地)』には朝廷に申し出る条がないので、殆どここに対応する記事はないのであるが、

今より後ちとうこくとはにんこくしかのふくてんをそなえへ奉るべき
さうしのしそんさら／＼かみのくらはは、かりしめししやけをな

「嚴嶋ニ奉仕スル事」では「日本國ノ大日如來ハ伊勢太神宮ト安藝之嚴嶋ナリ」とする。

前引の源平盛衰記には「大宮」「中宮」「客人宮」「眷属神」といった形で嚴島の各社が示されていたが、このような合祀の状態については、他には、長門本に「のちにこ三十三所にていらせ給ふ」という表現があるだけである。「客人宮」が「氣比」の宮であることは「平家物語」の他の箇所に出て来るものの、他の末社については先の源平盛衰記の「八幡の別宮」という説明の外にはない。猶、中世物語『嚴島の本地』諸本には「大こんせん」「まつうとのこんせん」等が記されているが、源平盛衰記のものとは大きく異なる（長門本とは不明）。

二

長門本と源平盛衰記には嚴島の縁起が記されている（長門本の方が以下のように詳しい）ので、次に、それに目を通したい。

長門本によると、嚴島大明神は「神武天皇御代のたち始」に「供御のみねなるか故」に九州の「かまと山」に鎮座したとのことである。当時、嚴島の方は神武天皇によって「御賀嶋」と名付けられた。その経緯は、天皇が長門国に行宮を設けられた時「此嶋の眺望殊勝なるよし聞しめされて此嶋にわたらせ給ひて御賀のまいを」舞わせられた。その舞が大変に素晴らしかったので、それでその時から、この島は御賀島と呼ばれることになったというのである。

御賀島が嚴島と呼ばれるようになった次第は佐伯藏本（鞍職）に関わる。ここも長門本が詳しいが、この部分は、後述のように中世物語の『嚴島の（御）本地』（『嚴嶋御縁起』）の話と重なる。

推古天皇の御代に播磨国印南野に「七聲鳴鹿」がいた。天皇は、その鹿を見参に入れるようにと、佐伯藏本に命じた。そこで、藏本は、河内国柿明神の檀で弓を作り、印南野に入つてその鹿を射止めた。ところが、その鹿は金色で九色をしていた。金色の鹿を見て、天皇は公卿僉議を開いた。その結果、「権者」と見られる鹿を射た罪は重いということになって、藏本は安芸国のささら浜に流されてしまった。

右の部分も源平盛衰記にはない。しかし、慶応義塾図書館蔵の『嚴島の本地』には極めてよく似たところが出て来る。異なる点は、「七聲鳴」が「きもをけす」のような鳴き声とされていること、長門本では藏本が一人で鹿を追つたように見えるが、「いてのものをすくり」と「いて」を率いていること、河内国柿明神の檀の弓が「いつみのくに大といの郡」の「こかねのゆみこかねの矢」となっていること、九色が「しつけつのほししやくのあしのあさやかに」「おもてもむけられすか、やくやうに」といった表現になっていること、公卿僉議ということがなく天皇の裁定となっていること、藏本の流された地が「あきすわうのさかい大竹といふ所」となっていることと等である。随分異なるようだが、筋は同じなので、細部の違いと評されようか。

藏本が漁をして浦々を伝っていると、紅の帆をあげた船のようなものが

「平家物語」諸本に描かれた

厳島大明神、厳島社（一）

橋 口 晋 作

厳島社は、推古天皇元年に創建されたと伝えられる古い神社であるが、この神社が盛んな信仰を浴びるようになったのは平清盛が安芸守に任じられてからであるらしい。このような事情から厳島大明神、厳島社は、「平家物語」で、清盛の生きている時代に盛んに作品に登場する。しかも、厳島大明神は、清盛の時代から源頼朝の時代に世の勢いが移って行く、その経緯にも深く関りながら描かれているのである。従って、「雅頼卿ノ侍夢見ル事」の章段などは早くから注目されて来たし、最近の『平家物語研究事典』^(注一)では「厳島」を始めとして七つの関連項目が立てられて相当に詳しく説明されている。このように相当に研究されている厳島大明神、厳島社であるが、筆者は近年「平家物語」諸本に描かれた大明神、神社について一連の考察を続けているので、そのような立場から改めてこの厳島大明神、厳島社を取り上げ、私見を述べてみたいと思う。

厳島大明神の性格については、長門本が「旅の神」「仏法興行のあるし」

「慈悲第一の明神」と記している。その「垂跡」は源平盛衰記に「天照太神之孫娑竭羅龍王之娘」とある。「娑竭羅龍王之娘」ということは、延慶本や四部合戦状本では「海畔ノ鱗ニ縁ヲ結ヒ給」「女躰」という曖昧な表現でしか示されていないが、長門本、源平闘諍録ならびに当道系諸本では、「しやかつら龍王の第三の姫宮」（長門本）ともっと詳しい。これらの内、長門本は更に「八歳の龍女にはいもと神宮皇后にもいもと淀姫にはあね」と、その姉妹関係まで具体的に記している。

源平盛衰記は、この「垂跡」の外に更に「本地」を挙げて、「大宮は大日弥陀普賢弥勒 中宮は十一面観音 客人宮は仏法護持多聞天 眷属神等は尺迦薬師不動地藏也 惣八幡の別宮とそ申ける」とする。このように源平盛衰記は大宮の本地以下を具体的に記しているが、源平盛衰記のように正面きって「本地」を論じるのは、他には源平闘諍録があるだけである。ただし、源平闘諍録は僅に厳島大明神の「本地」として大日如来を挙げるに止まる。

ところで、この厳島大明神の「本地」のことであるが、よく読むと、これは諸本にある「入道厳島ヲ崇奉由来事」で、「大日」の名を出さない形で示されている。即ち、延慶本、長門本ならびに当道系諸本のうち八坂本は、前出の「慈悲第一の明神」ということも示す「胎藏界神」と言い、四部合戦状本と八坂本を除く当道系諸本は、その点を「越前ノ氣比社安藝厳嶋ハ両界ノ垂跡」という表現で示している。猶、「平家物語」諸本はこのように「氣比社」を対に取っているが、『古事談』の「清盛高野ノ僧ノ告ゲニヨリ